

(1) 2022年10月4日(火)1面 掲載

◆産大レクチャー ア・ラ・カルト<180>
グローバル 金 光林 教授

産大レクチャー ア・ラ・カルト <180>

「グローバル」という言葉が今改めて注目される。Global(地球規模の)とlocal(地域的な)を合わせた用語で、地球規模の視野を持ちながら、地域の視点で問題を捉え、解決していくという考え方がある。

(地球規模で考え、足元から行動せよ)ということとも言われており、企業における人材教育、マーケティング用語として取り上げられることが多い。この言葉は行き過ぎた「グローバル化」のデメリットを克服し、より良い方向に向かわせる概念でもある。

企業においては「グローバル」の実践例は多い。ファストフード店のメニュー

の言葉と関連し、英語で「Think Globally, Act Locally」

グローバル

ドナルドの「デリヤキマツクバーガー」がその一例である。日本独自の味付けであるこのメニューは日本で人気を集め、海外では「サムライバーガー」や「將軍バーガー」といった名前もつけられているという。

株式会社ポケモンは「ポケモンローカルAc

のキャラクターが、各地の魅力を発信するという活動のことである。海外で販売するゲームでは登場するキャラクターの名前を現地の子供たちにもなじみやすい、各国独自の

屋の特徴を考慮し、自社の製品が日本人の暮らしにマッチするように工夫した結果、日本で人気企業になった。

2020年から新型コロナウイルスのパンデミ

金 光林

のウクライナへの侵攻によって、世界は統合ではなく、対立・分裂の相模も見せている。しかし、行き過ぎたグローバル化にデメリットがあるのと同じように、また行き過ぎたローカル化にもデメリットは存在する。「地産地消」が好まれているが、実態を言えば「地産地消」だけでは供給がと

考え、地域にしっかりと根ざした活動が行える人材を養成することが必要である。世界の話ばかりしても空想の感が免れないし、地域のことしか知らないということとは如何(いか)にも貧血症状である。そろそろ新型コロナウイルスのパンデミックから解放される時期でもある。「Think Globally, Act Locally」をもう一回呼びかけた

(教授)

11毎月1回掲載11

◆移住・定住促進等

施策の提案書を桜井市長に提出した間島チームリーダー(前列右から3人目)をはじめ、移住・定住推進パートナーチーム市役所多目的室



柏崎市移住・定住推進パートナーチーム

報告会



住む人来る人の
満足度が高く
最高に熱いまちへ

市が本年度設置した移住・定住推進パートナーチーム(チームリーダー・間島博英さん、メンバー8人)が「住む人来る人の満足度が高く最高に熱いまちへ」をスローにした施策の提案書を桜井市長に提出し

移住・定住促進 施策提案書まとめ提出 民間パートナーチーム

た。受け取った市長は「満
意回答はできないかも知れ
ないが、少なくともゼロ回
答にはしない。提案したた
いた施策を実現していきたい」と述べた。

市では、第2次移住・定
住推進行動計画(2022～
25年度)で、目指す姿と
して「二人でも多くの方が
柏崎に定住することで、人
口減少の流れを緩やかにす
る」、基本方針に「仕事と
人での呼び込み」「市民
の幸せな暮らしの追求」の
2点を掲げる。

同チームはこの計画に基
づき、5月に設置された。

めながら、移住・定住の推
進により、人口減少の流れ
を緩和する」を目的に、交
流・仕事・教育の三つの重
点項目を掲げ、現状の問題
と原因、柏崎市の特性と求
め、シミュレーションなどにつ
いて議論を重ねてきた。ネッ
トによる市民アンケート
、個別のヒアリングも実
施した。

この過程では、条件など
をつけて4人のベルソナ
(架空の人物像)を設定し、
満足度の高い暮らしのた
め、仕事、住まい、教育、
交流などの面から七つの施
策群・22個の施策をまとめ
た。さらにその中から移
住マッチングサイトの制
作・運用、「お試し体験&
シェアハウス」「柏崎愛を
育む総合学習と定住アン
ケート」のほか、「移住コ
ンシェルジュの設置」など
六つを優先度が高い施策
として提案した。これらに
関わる予算なども提示し
た。

また今後の同チームの方
向性として「移住・定住に
資する戦略をたてる参謀的



発行所 柏崎日報社
販売部 柏洋社
〒945-0066
柏崎市西本町1丁目6-1
TEL 22-3121 FAX 22-7150



役割「市民連携の中核を
担う中間調整的役割」「ボ
ジティブなマインドを醸
成する旗振りの役割」と
位置づけた。KGI(重要
目標達成指標)最終目
標)、KPI(重要業績評価
指標)・中間目標)も設定
した。提案書は先月30日に
提出した。

桜井市長は「具体的な施
策など、素晴らしい提案書
で数百万円の価値はあ
る。市が考える移住して
もらいたい人、ずっと住み続
けてもらいたい人と近い
世代の皆さんからの提案
は意味が大きい」と受け止
めた。

間島チームリーダー
(41)は「提案書の作成に向
け、他市町村の事例を学ぶ
などいろいろ勉強しなが
ら、ゼロベースから積み上
げてきた。市から提案を認
めてもらえたら、市民連携
で実際に行動に移したい。
その意味で提案書の提出は
第一歩だ」と述べた。

(4) 2022年10月8日(土) 2面 掲載

◆パラ卓球日本代表 竹守選手迎え練習
産大「学生に良い刺激」

パラ卓球日本代表 竹守選手迎え練習

産大「学生に良い刺激」

千葉県松戸市在住、知的障がい者卓球連盟世界ランキング7位の竹守彪(たけし)選手(28)が新潟県産大卓球部の練習に参加した。ハードスケジュールを縫っての来校に、小黒裕二監督は「学生にとって良い刺激になった」と感謝した。

竹守選手はリオ、東京パラリンピック卓球日本代表。主な戦歴は東京パラ5位入賞、チャンピオンリーグ2021優勝。先月23・24日、新潟市カルチャーセンターで開かれたパラ卓球日本代表・竹守選手(中央)を迎えた産大卓球部



ラ・ドジャパン・年代別オープン卓球大会2022
の男子20歳代で優勝した。11月には、スペインで開催される世界選手権に日本代表として出場する予定だ。

今回の来校は、市内高柳町門出にある母親の実家に

立ち寄ったことがきっかけ。先月26日、柏崎卓球連盟を通じ、同大の練習に参加した。約2時間、一緒に練習した後、1試合ゲームをした。

対戦した谷口来弥選手は「練習ゲームは3-2で勝ったが、竹守さんと試合を通して感じたことは健常者よりも不自由な中、競技に本気に打ち込んでいて尊敬できた。同じ競技をしている選手として竹守さんのように目標に向かって全力で卓球をしていきたい」と話した。

小黒監督は「パラ出場選手も健常者と変わらず、勝つために日々練習を重ねている。日本代表を獲得するためのポイントを積み上げなければならぬ。海外での遠征試合にも出場するなどハードなスケジュールの中、練習に来ていただけた

ことは学生にとって良い刺激になった」と感謝し、11月の世界選手権で活躍に期待を寄せた。

◆地域に学び地域をおこすー実践活動レポートー

徹底した品質管理を学ぶ ～山波農場にて～

「新治産学連携」 地域に学ぶ 地域をふさぐ

ー実践活動レポートー

徹底した品質 管理を学ぶ ～山波農場にて～

3年生の正規科目「インターシップ」では、希望する企業・団体で5日以上の就業体験が必須となる。9月中旬、稲刈り本番を迎えた山波農場（市内水上）で3年生の福田拓実さんがヒエ取りに汗を流した。

業後の進路として農業を視野に入れている。山波農場は農業の使用を最低限に抑え、豊富な水と集落の自然資源を生かした循環型農業を実践し、精米方法や真空パックに至るまで「良質なお米の美味（おい）しさ」の提供にこだわる農業法人だ。

代表取締役の山波剛さんは「農業に関心を持つてくれる若い人が増えるのはうれしいこと。農業が好きと言ってもらえることも大切だが、一緒に働く仲間がいていって

もらいたいし、その環境作りを心掛けてい」と話す。農業の効率性や一年を通して安定した収益を上げること、高齢者、若年層の雇用を支え、集落の持続的な発展を目指す姿勢は、実習した福田さんにもすっかり届いた。

「当初考えていた米作りの印象がかなり変わった」と福田さんは率直に言う。

「人の手で行う丁寧な雑草取りの作業があつて、美味しさと安全性の高いコメができてい」と改めて感じた。そして人づくりに力を置いており、農業はチームワークだと思ひ知った。実習中は、自分の未熟さと知識や経験のなさを感じること

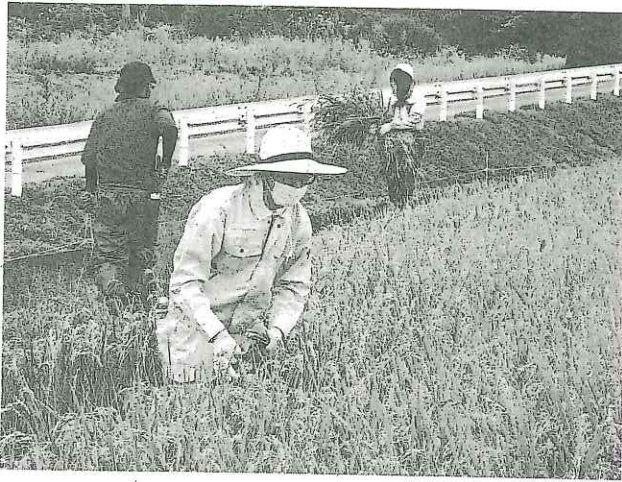
とが多く、悔しさはあつたが一層農業に携わりた」と感じた5日間だった」と話した。

ここ数年、若手たちが、市内の農業法人に就職する人たちが出てきてい

る。

フィールドワークで米や野菜を育てる機会に恵まれた産大生から地域の農業の担い手が育ち始めている。

（同大学地域連携センタ



◆二つの酒蔵会場にシンポ 産大附属柏崎研究所 来月12・26日に

二つの酒蔵会場にシンポ

産大附属柏崎研究所 来月12・26日に

新潟産大(梅比良眞史亭長)の附属柏崎研究所(春日俊雄所長)が11月12日に原酒造、26日に阿部酒造を会場に、第5回柏崎学シンポジウムを開く。テーマは「暮らしと地域を豊かに結ぶために」。会場参加とオンラインで行く。各回ともシンポジウム終了後、会場を移動し、文化体験「秋の柏崎食べこじ」として、お酒と料理を楽しむ企画もある。

同大は「地域の地(知)の中核的拠点」として2016年度、柏崎研究所を開設した。柏崎学では地域の産業、経済、社会、歴史・

文化、観光・スポーツなどさまざまな分野に関する調査・研究を行い、課題解決や振興に寄与することを目的にしている。

日々の暮らしの舞台とも見える「地域」への関心は、モノの豊かさやグローバルな情報環境を背景に長期的に低下傾向にあり、失われた20年ともされる。さらに新型コロナウイルス感染症の拡大がそれを決定づけることになった。シンポジウムでは、地域の歴史と文化の一大拠点の「酒蔵」にスポットを当て、魅力を改めて学ぶとともに、日々を心

豊かに暮らすきっかけにする。副題を「歴史・文化の拠点、地元酒蔵の魅力を改めて学ぶ」とした。

12日は2回シリーズの第1回目。県醸造試験場の金桶光起場長の基調講演「日本酒の歴史・本県の醸造・原酒造」。続いて、酒造り談義に移り、原酒造・原吉隆社長、金桶場長、フードコーディネーター・小早川陽青さんが酒造り秘話や未来、フレンチ料理と日本酒の可能性を語る。終了後、ザ・シャンカールで文化体験。26日は第2回目で、金桶場長の基調講演「日本酒の

美味(おい)しき(科学的な知見から)」。酒造り談義では、阿部酒造・阿部裕太社長、金桶場長、古賀学・松蔭大学経済学部長・教授が酒造りの秘話や未来、酒蔵における観光・交流の可能性。終了後、kitchen105で文化体験。

定員は各回20人。シンポジウムは各日午後1時半～3時20分、文化体験の会費は1万円(税込み)で当日徴収。会場出席の申し込みは電話24・8664。シンポジウムのオンライン参加はkmaezawa@ada.nsu.ac.jp。

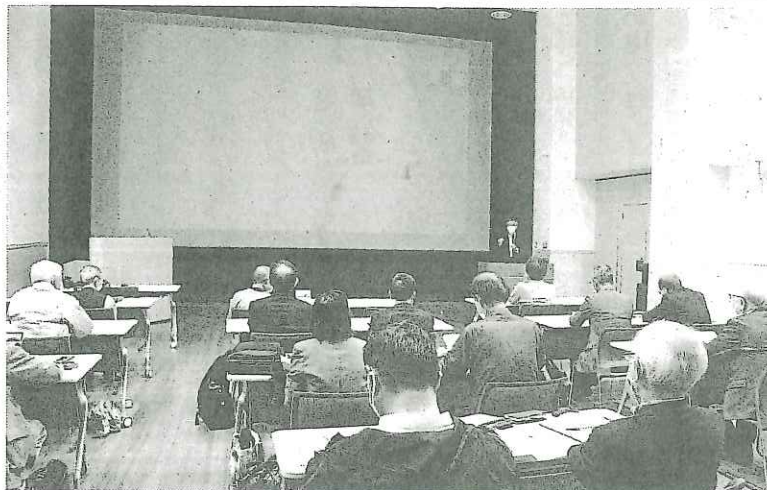
◆SDGs・脱炭素テーマ 公開講座始まる

SDGs・ 脱炭素テーマ

公開講座始まる

新潟工科大と新潟産大の
共催で「SDGs・脱炭素
への挑戦」の基礎を学ぶ公
開講座が工科大で始まっ
た。6回連続講座の初回を
渡辺登・新潟大学教授が務
めた。両大学の大学生、一
般聴講生など約30人が参加
した。

主催者を代表して大川秀雄・工科大学長と寄附講座
を提供した石塚修・地域情
報研究所代表があいさつ。



新潟工科大を会場に始まった公開講座「SDGs・脱炭素への挑戦」

それぞれ脱炭素社会の必要性を訴え、この課題に対して工科大と産大の文理共催の意義を訴えた。17日に開かれた。

初回の講義はNHKスペシャル「2030未来への分岐点」のシリーズ第1回「暴走する温暖化・脱炭素への挑戦」を見て、地球温暖化の現状と近未来の惨状を改めて認識する機会とした。さらに「100年間に最悪4・8度上昇、1・5度以内に抑えないと世界中で異常気象や海面上昇が起

こり、食料不足などの深刻な被害をもたらす」と警告する政府間パネル(IPC)のレポートなどを紹介した。

講座はその後、第2回は24日、第3回は31日、第4回11月7日、第5回同14日、第6回同21日。会場はいずれも工科大。講座は基本的に6回全シリーズ参加が原則だが、部分的な参加も認める。連絡は新潟工科大キャリア・産学交流推進課(電話22・8110)へ。

◆地域に学び地域をおこすー実践活動レポートー

留学生から高柳町みる～企業研修～

「新潟産業大学」 地域に学び 地域をおこす

ー実践活動レポートー

留学生から 高柳町見る

～企業研修～

新潟産業大学には「チ
ューター」という留学生
の支援をする学生の組織
がある。チューターは留
学生が日本での大学生活
に慣れるための手助けを
し、日本語力向上の支援
や日本人学生との交流促
進を目的とした活動を行
う。その活動の一つに「留
学生企業研修」がある。

研修の目的は、卒業後

新潟産業大学には「チ
ューター」という留学生
の支援をする学生の組織
がある。チューターは留
学生が日本での大学生活
に慣れるための手助けを
し、日本語力向上の支援
や日本人学生との交流促
進を目的とした活動を行
う。その活動の一つに「留
学生企業研修」がある。

研修の目的は、卒業後

日本での就職を希望する
留学生に日本の産業の現
場を体験させ、新潟県の
企業を知る機会を作るこ
とだ。企業側が留学生と
の交流を通して外国人の
雇用を考える契機として
ほしいという意図もあ
る。

今回の企業研修は9月
20日にじよんのび村協会
(市内高柳町)で行われ
た。まず、協会の理念や
事業の方向性、社会的役
割について伺った後、施
設を見学。その後、これ
まで実施した集客イベン
トや宿泊プランなどが説

明された。参加した留學
生の多くが初めて高柳町
を訪れたが、その豊かな
自然と魅力的な事業に強
い関心を抱いた。

参加した中国内蒙古自治
区出身の激根(チエゲ
ン)さん(大学院1年)

は、「過疎化の中で、黒
字化に向けてのさまざま
な企画立案や改善の努力
を伺い、感動しました。

高柳町には温泉も含め、
恵まれた自然資源があ
り、外国人にとって訴求
力の高い観光地だと感じ
ました。特に雪のイベン
トやスカイランタン、囲
炉裏を囲んでの食事は新
鮮でした」と話した。

代表取締役の吉村英治
さんは、「学生の皆さん
からのご提案(部屋の一
輪挿し、外国人向けサイ
ン、かまぐら作りイベン
トなど)を今後の改善の
参考にするとともに、こ
れからもじよんのび村に
若い力とアイデアを頂け
るとうれしいです」と期
待を寄せる。

留学生にとって地域の
魅力を知るだけでなく、
日本での就職を目指す上
で貴重な体験となった。
(同大学地域連携センタ
ー)



(9) 2022年10月31日(火)1面 掲載

◆産大レクチャー ア・ラ・カルト<181>

「複製芸術」の衰退 黒川 敬三 経済学部教授

産大レクチャー ア・ラ・カルト <181>

文化経済学の音楽分野では、生演奏を「実演芸術」(または「舞台芸術」)、レコードなどの録音物を「複製芸術」と呼ぶ。レコードの発明によって音楽に触れるひとの数は大幅に増えたが、クラシックやジャズの世界では実演芸術が主であり、複製芸術はあくまでも従であった。

ところがロックにおいては、その関係が逆転した。1970年代からロックミュージシャンたちは数カ月間、場合によっては数年間レコーディングスタジオに入り浸って制作に励み、数々の名盤を生み出した。テクノロジの発達がミュージシャンたちを後押ししたのも確かだが、それだけの

時間と制作費をかけられたのはレコード(のちにCD)の売り上げが保証されていたからこそである。この傾向は英米の人氣バンドにおいて顕著で

めってしまったバンドもあった。それでも売り上げが落ちるとはな、ロックにおける複製芸術の黄金時代はしばらく続いた。しかし2000年代か

がまったく売れなくなってしまうのだ。今やバンドのおもな収入源は生演奏になった。ある意味では原点回帰である。新しい世代のミュージシャ

「複製芸術」の衰退

黒川 敬三

あり、彼らは新作の発表に合わせてプロモーションのためにワールドツアーに出かけた。一方でレコードの再発が不可能と判断してライブ活動をや

ら2010年代にかけて時代は大きく変わる。インターネットを利用した音楽のダウンロード販売やストリーミングサービスの興隆によって、CD

たちはライブの宣伝のためにわずかな費用で録音物を制作することを余儀なくされた。当然、CDの質は低下し、もはや「複製芸術」はほとんど生

まれなくなってしまう。日本でも1990年代のCDバブル期に人氣があつた某シンガー・ソングライターが「サブスクを考えた人は地獄に墜ちてほしい」とツイートして話題になったが、これも時代の流れであろう。70を過ぎた大御所のミュージシャンたちも今やライブ活動に熱心である。彼らはもはや新曲を出す必要性を感じておらず、現在はレコード会社と契約していないものも

多い。彼らはすでに過去の名曲という莫大な「文化資産」を持っている。バンドとともに年齢を重ねた観客がライブに期待するのは新曲ではなく昔の曲なのだ。そして、過去の「複製芸術」の再現がどんなに不完全であろうと、主役が三数十年前に亡くなつていようと、観客はバンドとともに「ボヘミアン・ラプソディ」を歌うのだ。

(経済学部教授)
毎月1回掲載